



天津の大王廟跡地調査報告 幸地朝常の足跡を求めて

後田多 敦
(非文字資料研究センター研究員)

中国天津の「大王廟」跡地調査を2019年8月16日(金)から19日(月)まで、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科の院生(馬程浩さん=前期2年、朱勃瑀さん=前期1年、宋浩さん=研究生)と行った。「大王廟」跡地を確認し、天津での位置環境を把握でき、写真なども得ることができたので調査結果を簡単に紹介したい。

*

天津「大王廟」は金龍四大王を祀る場所だったが、建物などは現存しない。大王廟は19世紀末における明治日本の「琉球処分」に対する琉球人の救国運動を考える上で重要な場所。リーダーの一人・幸地朝常(中国名・向徳宏、写真①)が、大王廟を天津での活動拠点としていた。幸地が天津を拠点の一つとしたのは、直隸総督・北洋通商大臣の李鴻章がいたからである。明治政府は琉球国併合を進めるなかで1875(明治8)年に琉清関係断絶命令を出し、500年に及ぶ琉球と中国の関係断絶を迫った。それに対し、琉球国王尚泰は幸地朝常らを清国へ派遣し抵抗を本格化させた。

幸地朝常(1843~1891)は琉球国末期の王府幹部で、夫人は最後の国王尚泰の姉。琉清関係断絶命令に対しては、王府鎖之側(サスヌスバ:外交儀礼担当)として内務卿大久保利通らとの交渉を担った。その後、物奉行(財務担当)のとき王命で渡清。天津や福州で琉球への救援を訴え続けて、帰国することなく客死している(注1)。

王命を受け1876(明治9)年に渡清した幸地、伊計大鼎(蔡大鼎)、名城世功(林世功)らおよそ40人は、進貢使節として北京での任務を終え福州に戻っていた国頭盛条(毛精長)らと合流し、共に福州で嘆願活動を行っていた。そして、明治政府が1879(明治12)年4月(新)に琉球国の王権を接收し沖縄県を設置したとの情報に接すると、幸地は李鴻章のいる天津に向かった。

李鴻章側の記録によれば、天津に到着した幸地は光緒5年5月14日(1879年7月3日)、李鴻章に琉球救

援の軍隊派遣を要請している。幸地は同年6月5日(新7月23日)にも、軍隊派遣の請願書を出している。直前の4月には前米国大統領グラントが北京に入る前と帰路、李鴻章と会い琉球事案を議論していた(注2)。

国頭盛条と伊計大鼎、名城世功らも光緒5年(1879年)8月14日には福州を出発、上海経由で8月27日に天津に入り、幸地朝常と会っている。名城によれば、幸地は「大王廟」に仮寓し琉球救援を要請していた。国頭らはこの際、幸地から琉球三分割案が清国と日本の間で議論されていることを聞かされた。国頭らは9月2日に天津を離れ、北京へ向かった。国頭、伊計、名城は北京総理衙門に琉球救援を訴えることになる。そ



写真① 幸地朝常(向徳宏)

表①幸地朝常の天津滞在時期

所在	資料	清年号	西暦	日本
天津	請願書・李鴻章宛	光緒5	1879	明治12
天津	請願書・李鴻章宛	光緒5	1879	
天津	覚書・李鴻章宛	光緒6	1880	明治13
天津	竹添報告	光緒7	1881	明治14
福州	請願書	光緒9	1883	明治16
福州	請願書	光緒10	1884	明治17
福州	請願書	光緒11	1885	明治18
福州	請願書	光緒11	1885	
福州	請願書	光緒11	1885	
福州	請願書	光緒11	1885	
天津	請願書・李鴻章宛	光緒11	1885	
天津	請願書・李鴻章宛	光緒11	1885	
天津	請願書・李鴻章宛	光緒11	1885	
注2				

して、名城は光緒6年(1880年)10月18日、分割阻止のため北京で自死している(注3)。

幸地の名前のある請願書が光緒9年(1883年)に福州で出されているので、そのころは福州にいたようだ。その後、幸地は光緒11年(1885年)5月には再度、天津で李鴻章に琉球への軍隊派遣を要請している。幸地は1885年に天津に戻った際にも、大王廟に滞在したと考えていだろう。

*

前置きが長くなったが、今回の調査目的は大王廟の場所や天津における立地環境を確認することだった。

写図②は1846年の天津の地図で、地図上部の横に流れるのが南運河。南運河沿いに書き込んだ矢印先が大王廟(注4)。写図③は日本の海軍中尉・曾根俊虎の『北支那紀行』に描かれた光緒元年(1875年)の大王廟である(注5)。地図の右斜め下を流れる白河と南運河が合流する三岔河付近だ。

幸地朝常が大王廟に滞在したのは、光緒5年(1879年)5月14日ごろからなので曾根図絵のおよそ4年後。幸地が滞在していたころは、このような状態だったと考えていい。

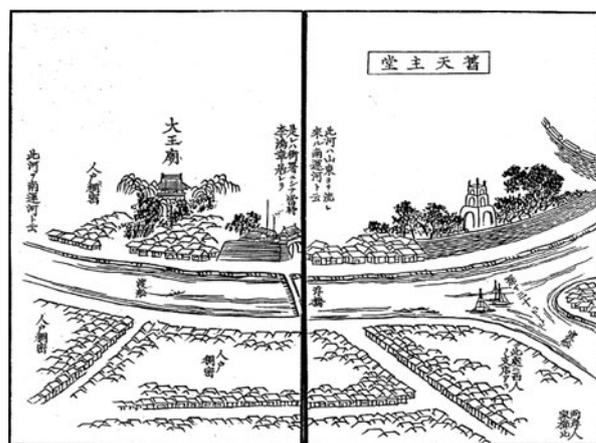
写図③右図右側の文字は「此河ハ山東ヨリ流レル南運河ト云」で、左絵図の右端の文字は「是レハ衙署ニシテ當時李鴻章居レリ」。左端には「此河ヲ南運河ト云」とある。大王廟は李鴻章の住まいと役所のすぐ隣にあったことが確認できる。

幸地は李鴻章の住まいの近く大王廟に滞在しながら、李鴻章へ琉球救援のための軍隊派遣を要請し続けていたのである。北京へ向かう途中の国頭盛条、伊計大鼎、名城世功らが8月27日、幸地と会った「河北宏盛客店」自体は確認できないが、河北地区は南運河大王廟側なので、おそらく大王廟の近くの客店だったのだろう。

『北支那紀行』を書いた曾根俊虎は日本の海軍軍人で、琉球とのかかわりも深い。福州にある琉球館に対しても諜報活動を行っていた。その曾根が光緒元年(1875年)段階で、天津の状況を詳細に把握していたことを考えれば、幸地の滞在中も当然ながら、日本の監視の眼は厳しかった。

天津領事竹添進一郎は明治14年(1881年)8月10日に以下のような報告を伊藤博文と井上馨宛に行っている。

「一昨年琉球復封之歎願トシテ航清致シタル琉人即チ向徳宏ノ一列ハ李鴻章衙門ノ裏手大王廟中に潜ミ居リタ



上地図(写図②)は道光26年(1846年)の天津の地図。下図(写図③)は明治8年(光緒元年、1875年)の図。

ル処、昨年来失踪不分明ナリ。然ルニ近日ノ上海申報ニ琉球人天津病院云々ト仰々敷掲載致タレバ、直ニ探索ニ及ビタルニ、右ハ一昨年渡航致シタル一列中ノ兩人ニシテ、辮髪ヨリ衣服等に至ルマデ支那人ニ扮装シ容易ニ其ノ琉人タルヲ弁別スル能ハズ。而シテ不相替大王廟中ニ潜ミ居、何モ事替リタル様ニハアラス、仍而不取敢此段内稟ス」(注6)

日本は幸地が明治13年(1880年)から、「李鴻章衙門ノ裏手大王廟」に滞在していることを把握していたが、しばらく所在不明となり、明治14年(1881年)8月ごろになって再び、数人で大王廟に滞在していることを再度把握できたことが分かる。

近代天津博物館の刘悦館長によれば、イギリス人宣教師で医師の馬根濟は、李鴻章夫人の病を治療したことか



ら、李鴻章の信頼を得て大王廟内で診療を始めたという。大王廟内での診療は光緒5年(1879年)のことで、これが天津における西洋病院の先駆けとなる。無料で診察したという。病院は光緒6年(1880年)には租界地に移転し「倫敦会施医院」として開業した。幸地が滞在していたことで、大王廟は診療所としての役割ももち、多くの人が入り出りしていた。幸地が滞在するには最適な場所だったのであろう。

『天津案内』(大正2年=1913年)によれば、大正初期大王廟は天津衛生総局として使用されていたことが分かる。天津衛生総局は「天津城内外の民生を保衛するを以て目的とし食物検査、医薬の考察、道路の清潔法は勿論太沽港の船舶及関内鉄道の汽車検疫伝染病予防、窮黎の養育、病症の施治等総て衛生に関する事務を総括」していた。明治42年(1909年)発行の『天津誌』でも、大王廟は衛生総局として使用されているとある(注7)。

大王廟は南運河沿いにあり、李鴻章衙門と隣接するなど天津の重要な場所にあった。そして、そこには一時ではあったが西洋の診療が置かれ、それが天津における最初の西洋式の医療機関としても利用されていた。

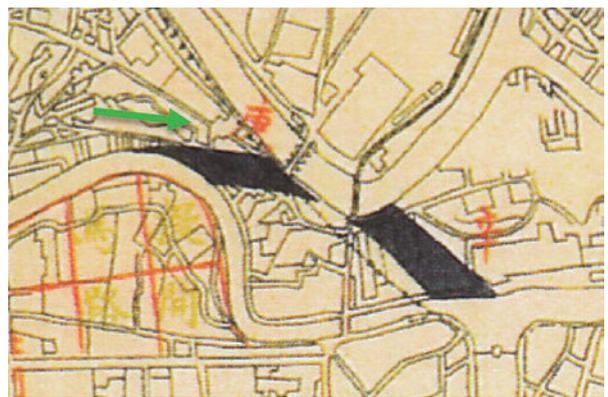
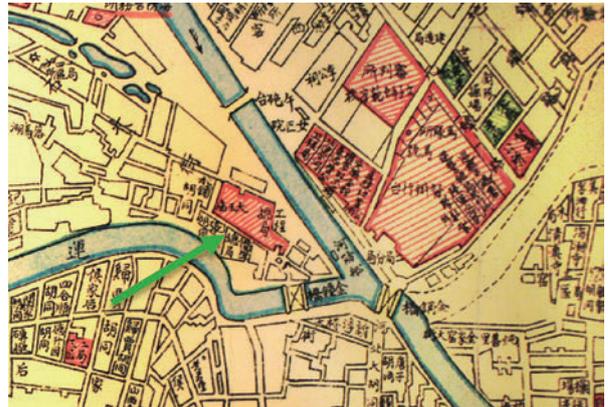
*

その大王廟跡地は、現在どうなっているのか。建物は1960年には壊されたようだ(注8)。南運河や三岔河付近は埋め立てと開削などで地形が変わってしまっている。

旧城市外北部の南運河歪曲部分は1918年、洪水対策のため埋め立てと開削工事が行われた。そこは明清以来、交通の要所であり物流の拠点として賑わっていた。写図③で描かれた場所辺りで、李鴻章衙門などがその対象エリアとなり、工事によって大王廟の立地環境も大きく変わった。写図⑤から⑦で見ると、南運河は歪曲を修正され、三岔河の位置も大きく移動したことが分かる。

写図⑥の説明では「庚 大王廟前裁営取直已開工明春過水」とある。南運河は歪曲を修正されたが、工事後も大王廟の前を通っていたことが確認できる。そして、

1918年の工事後の地形は現在(2019年)の位置関係と大きな違いはない。とすれば、大王廟跡は三岔河の三角形に近い陸地側にあたる。そして、南運河にかかる金



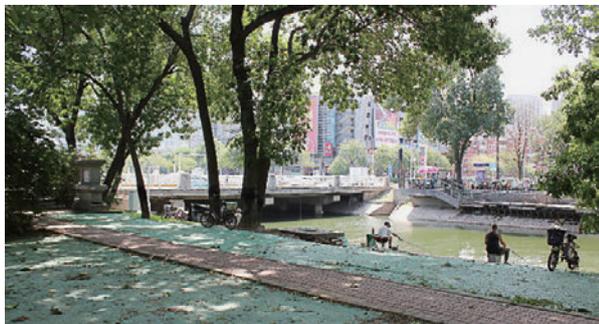
上から

写図④ 「大王廟」(旧天津城・鼓樓の展示)。撮影時期は不明。「大王廟」の文字の上に「勅定」とある。

写図⑤ 1925年の埋め立て後の地図(旧天津城・鼓樓の展示)。緑の矢印の先が大王廟

写図⑥ 1920年の地図。黒で塗りつぶしたものが開削後の運河

写図⑦ 工事前と後の変化



写真（2019年8月18日）上から

写図⑧ 金剛橋から大王廟跡付近を望む。写真左が南運河

写図⑨ 金鐘橋を越えた辺り。前方の「天津之眼」と呼ばれる観覧車が見える。工事中の辺りに大王廟があったと考えられる。

写図⑩ 河北区側から見た南運河と金鐘橋

り、その道沿いの南運河には釣り糸を垂れる人々が見える。現在の「大王廟」付近は、活気と静謐さが交差するいい場所だった。

【注】

- (1) 後田多敦『琉球救国運動』（出版舎 Mugen、2010年）参照。
- (2) 雷祿慶編『李鴻章年譜』（台湾商務印書館、1977年）、国家清史編纂委員会『李鴻章全集 32』（安徽教育出版社、2002年）など参照。表は西里喜行『琉球救国請願書集成』（法政大学沖縄文化研究所、1992年）などをもとに作成。
- (3) 蔡大鼎『北上雑記』（沖縄県立図書館蔵）参照。
- (4) 天津市規制和国土資源局編著『天津城市歴史地図集』（天津古籍出版社、2004年）。断りのない古地図は本書から。写図⑦の地図は、天津地域史研究会『天津誌』（東方書店、1999年、166頁）から。以下地図・写真中の矢印は筆者。
- (5) 曾根俊虎『北支那紀行』（『幕末明治 中国見聞録集成 第2巻』ゆまに書房、1997年）
- (6) 伊藤博文編『秘書類纂 雑纂其一』（秘書類纂刊行会、1936年）319頁
- (7) 富成一二『天津案内』（中東石印局、1913年）（吉澤誠一郎『近代中国都市案内集成 第20巻』ゆまに書房、2012年）53頁。清国駐屯軍司令部編『天津誌』（博文館、1909年）『近代中国都市案内集成 第19巻』（ゆまに書房、2012年）218頁
- (8) 「中国百年被拆著名建築之疼痛史」
http://tp.hkcd.com/content/2018-05/02/content_1087597.html
(2019年8月23日閲覧)

鐘橋のその先の方向だということになる。

写図⑧は、今回の調査で金剛橋上から撮ったもので、現在の三岔河である。写真左手が南運河で遠方に見えるそれにかかる橋が金鐘橋。右手に見えるのが「天津之眼」と呼ばれている観覧車。大王廟は正面の塔と木々の後方で、金鐘橋の南運河を越えたその先辺りだと理解していいだろう。写図⑨でいえばトラックの後方エリアということになる。往来では人や車が行き交い賑わいがあ